



## 国際会議報告

### 1. 夏の国際会議：ヴィトゲンシュタイン・シンポジウムを中心に

中山康雄（大阪大学）

2001年に僕が参加した国際学会について報告することにする。

ある日僕のところにどこからか、科学哲学と論理学をテーマにしたワークショップに関するメールが送られてきた。そこで、原稿を送ったところ口頭発表が認められ、ラスベガスへ向かうこととなった。僕が参加したのは、「科学的推論の計算モデルとその応用」と題したワークショップであり、最初はそれが人工知能国際会議 (International Conference on Artificial Intelligence, IC-AI' 2001) の一部として開催されたものとは知らなかった。しかも、このIC-AIは他の七つのコンピューター関係の大会と合同で行われるものだった。この大会は、2001年6月25日～28日にかけて行われ、口頭発表とポスター発表がそれぞれの分野で平行して行われた。僕が関係するワークショップは Claudio Delrieux と Jean-Yves Bezieau という南米系の人組織したもので、6月26日の丸一日を使って行われた。また、このワークショップは Paraconsistent Logic 関連の発表が多いという特徴を持ち、これは明らかにこのワークショップのオーガナイザーの人脈によるものである。僕は、「科学的推論と信念構造」と題した発表を行った。このワークショップの内容は、<http://www.lip.uns.edu.ar/cmsra/> で公開されている。また、IC-AI' 2001の内容は、<http://www.ashland.edu/~iajwa/conferences/2001/ICAI2001/icai.html> で知ることができる。ちなみに、今年度の大会も、ラスベガスで行われる予定である。この国際大会の具体的運営は、各セクションのオーガナイザーにすべてまかされて

いるようであり、個人的色彩の強い大会だと思った。

夏休みになり、僕はヨーロッパへと向かった。まず、スウェーデンを訪れた。ここでは、「意識の科学へ向けて」(Toward a Science of Consciousness) の大会が Skövde と言われる小都市のリゾート・ホテルで2001年8月7日～11日にかけて行われた。この大会には、十人を超える日本人が参加した。僕は、「感覚質、志向性、自己意識」という題でポスター発表を行った。国際会議には、申し込みばほとんど誰でも発表できるという形式のものがある。この大会もそうであった。著名な学者と無名の学生や素人の交わり合いがあり、議論や日常会話が初めて会った者同志の間で交わされる。このような国際大会は、多くあるものである。この国際会議は、1994年合衆国アリゾナ州のツーソンで始まったもので、数理論理学者 R. Penrose、脳生理学者 S. R. Hameroff、哲学者 D. J. Chalmers が中心に組織され、「ツーソン意識科学国際会議」とも呼ばれている。ツーソンとアメリカ以外の国で交互に開かれており、1999年には東京で開かれ、本学会のメンバーの何人かも参加していた。その関係もあり、今回多くの日本人の参加となったと思われる。話題性のあるテーマを決めて関連する分野の著名人を数人集めて行われたいくつかのパネル討論では、鋭い相互批判が行われるものが多かった。特に、Ted Honderich は、量子場の理論を完全に理解していないにも関わらず、自分のたてた必要十分条件の基準にあていないという理由で幾つかの冒険的研究を否定するという姿勢が納得いかないという

ことで物理学者の側からの激しい反批判にさらされ、このことが強く記憶に残った。意識の研究において哲学者の果たす役割とは何なのかということについて考えさせられた。その後、僕は、オーストリアのウィーン近郊の村キルヒベルクで毎年開かれるヴィトゲンシュタイン・シンポジウムに参加した。この報告は少し長くなるので最後に回すことにする。日本へ帰国後、8月27日～31日にかけて北京で開かれた第3回認知科学国際会議(The Third International Conference on Cognitive Science, ICCS 2001)に参加し、「メタファーと態度帰属」と題した口頭発表を行った。この国際会議は、日本や韓国が中心となり2年に一度開かれているものであるが、第2回大会は1999年東京で開催された。日本からの関係者は、日本認知科学会のメンバーが主である。個人的には「身体化された認知の創発と発達」と題したシンポジウムに興味深く聞いた。次回の大会は、2003年、オーストラリアで行われる予定である。また、2001年度は口頭発表などする若手研究者の旅費を日本認知科学会が支援していたので、次回にも、この若手研究者のための経済的支援は期待できそうだ。

2001年のヴィトゲンシュタイン・シンポジウムは、「ヴィトゲンシュタインと哲学の未来」と題してヴィトゲンシュタインだけをテーマにして開かれ、例年より多い参加者があった。シンポジウムは、招待講演の他に、「ヴィトゲンシュタインの位置付け」、「倫理学、心理学、美学」、「論理学と数学」、「ヴィトゲンシュタインと文化の理論」、「ヴィトゲンシュタインの生と彼の著作の編集」、「関連する問題」の6セクションに分けての発表があった。招待講演者としては、J. H. McDowell (Pittsburgh)、S. Cavell (Harvard)、J. Conant (Chicago)、M. McGinn (York)、B. McGuinness (Siena)、J. Floyd (Boston)、H. J. Glock (Reading)、J. Hintikka (Boston)、J. Schulte (Bielefeld)、E. v. Savigny (Bielefeld) などがおり、いずれもヴィトゲンシュタインに関する講演を行った。また、ヴィトゲンシュタインの遺稿がコンピューター上で検索可能になるということでヴィトゲンシュタイン研究が大きく変わるのではないかと(K. Nyiri (Budapest))、そもそもヴィ

トゲンシュタインの著作は複数の考えが一つに絞られずに表明されておりそのようなものとして読むべきだ(A. Pichler (Bergen))との意見もあった。全体として、ヴィトゲンシュタイン研究の状況はますます混迷してきているという印象を素人ながら抱いた。

日本からは、奥雅博氏(招待講演者)、丸田健氏、野村恭史氏、と僕という四人の科学哲学会メンバーのほかに、石倉氏という哲学者と丸山氏という教育哲学を専門とする人が参加・発表した。この四人の発表の題は次のものである: 奥「後期ヴィトゲンシュタインの数学の哲学」、丸田「ヴィトゲンシュタイン、メタファー、心的概念」、野村「色排除問題再考」、中山「言語、行為、心: 言語ゲームと態度帰属」。このように日本人の発表が多いのは例外である。また、丸田氏と野村氏という若手研究者が発表を行ったのもめずらしい。特に、この若手二人のヴィトゲンシュタイン研究者の発表は、評判が良かった。今後、若手研究者が積極的に国際学会で発表することが期待される。このシンポジウムについての情報は、ホームページ <http://www.sbg.ac.at/phs/alws/wittgenstein01.htm> から得ることができる。また、招待講演者の講演内容については、今年、*Proceedings of the 24th International Wittgenstein Symposium* として Hölder-Pichler-Tempsky 社から出版される予定である。投稿発表の方は、R. Haller and K. Puhl (eds.) (2001) *Wittgenstein and the Future of Philosophy: A Reassessment after 50 Years Papers of the 24th International Wittgenstein Symposium* に収録されている。

2002年度のヴィトゲンシュタイン・シンポジウムは、「Persons. An Interdisciplinary Approach」というテーマで8月11日から8月17日にかけて行われる。投稿の締め切りは4月30日となっている。心の哲学が副テーマの一つであり、Georg NORTHOFF (Harvard)、Fred DRETSKE (Duke)、Alvin GOLDMAN (Tucson/Rutgers)、Jaegwon KIM (Brown)、Jonathan LOWE (Durham)、Michael TYE (Temple) などが招待される予定である。詳しくは、ホームページ <http://www.sbg.ac.at/phs/alws/wittgenstein02.htm> を参照してもらいたい。

## 2. 国際学会報告

### FOIS (Formal Ontology in Information System) 01, 2001年10月16-19日、於合衆国メイン州オガンクィット

加地 大介(埼玉大学)

「オントロジー」という言葉は、世間では今や哲学用語として以上にIT用語として普及しつつあり、「オントロジー工学」に関連するセッションやワークショップが、情報科学や知識工学の学会でしばしば開かれている。本学会もそのひとつであるが、もっぱらオントロジーを主題とした独立の学会である点と、哲学的存在論の研究者が積極的に関わっている(パリー・スミスが三名の主催者の一人)という学際性において、際立っている。第二回の今回は、テロ後の混乱が残る中で80余名が出席し、その大半は情報システム関連の研究者・実務者だったが、哲学科出身で「オントロジスト」として情報産業に就職した「隠れ哲学者」も相当数いたようである(98年にイタリアで開催された第一回もほぼ同数の出席者だったそうだ)。

IT用語としての「オントロジー」は濃淡様々な意味で用いられるのだが、それを強引にまとめていえば、「概念・用語の体系をより有効な形で明示化するための技術」を表す。明示化の目的は、情報システムや知識ベースにおける情報・知識の共有可能性・再利用可能性・統合性・相互操作可能性を高めて、より有効な大規模・分散知識ベースや次世代 Web を構築していくことにある。したがってその内実は、本来の哲学的存在論から離れてITの世界で一人歩きしてしまっている感もあるが、現時点でも哲学的存在論の研究成果を積極的に導入していく必要性を主張する情報システム研究者が多数とはいえないが存在し、一部の哲学者もそれに呼応した研究を展開している。そうした研究者たちが中心となって次のようなテーマのセッションを繰り広げた：「一般論と方法論」「上位レベルオントロジー」「モデルと公理」「E コマース・オントロジストは実際に何をしているか?」「自然言語、メレオトポロジカル・オントロジー」「地理空間オントロジー」「オントロジー、意味論的統合/相互操作可能性、セマンティックWeb」「生物医学オントロジー」「同一性と制約」「用語資源、情報統合」

「曖昧性、細密性、プロセス」

学際的学会には、各専門間のある種の葛藤が伴いがちである。今回は、「皇帝の古い着衣：なぜ哲学はオントロジーと無関係であるか」と題する、P.ヘイズ(フレーム問題や素朴物理学に関連する情報論研究で有名)の挑発的なディナー・トークにそれが集約的に現れていた。ヘイズは、实在概念の認識者相対性や、パトナムの双生地球論証・チャーマーズのゾンビ論証の不毛性などを根拠に、哲学的存在論研究が情報システム研究に対していかに無効であるかを強調した。ピートたけし風の(?)攻撃的な彼のキャラクターを如何なく発揮した、エンターテイメント的講演だったとはいえ、哲学研究に対するあまりに皮相的かつ歪曲的な解釈にたまりかねた哲学者J.ロウ(最右翼のネオ・アリストテリアンであり、招かれて「形而上学の最近の進展」と題するオープニング・トークを行った。ちなみに彼自身は、自己の体系を情報システムへ応用することなどには、とんと関心がない。)が途中で反論した。それをきっかけとして、ヘイズの实在概念の矛盾や彼の主張の自己論駁性など、情報システム研究者の側からもさんざん批判されて、ヘイズは這々の体で講演を終えることとなった。ただ、ヘイズは、ネット上でオントロジー研究者の間で繰り広げられている哲学的議論の多くが、必ずしも情報システム研究にとって生産的でないと最近感じ、哲学への過剰なコミットメントに警鐘を鳴らしたかったようである。

他にも、転変めまぐるしいIT業界でのオントロジーの今後の展開の不透明性、オントロジー研究者間でのヘゲモニー争いなど、多くの問題点が学会中に指摘されていたが、同時に、情報システム研究の側の主催者であるガリーノとウェルティが示した、本質主義的存在論を応用したオントロジー技術‘Ontoclean’や、オントロジー工学からのフィードバックを受けた形でスミスが精力的に展開している「地理空間オントロジー」のような半ば哲学的な研究など、情報シス

テム・哲学双方の研究者において豊かな成果も多く見られた。いくつかのセッションでは哲学学会と見まがうばかりの内容の議論が交わされており、哲学研究者が協力することによって、工学研究者の無用な労力を省くことができる面も多いのではないかと感じた(ただし、それも「協

力」の仕方次第であるが)。主催者たちの気質を反映してか、概して建設的かつ友好的な雰囲気のもとで進行した学会であった。



## 海外便り

### ニュージャージー便り

中釜 浩一 (法政大学)

日本科学哲学学会会員の皆様。法政大学の中釜と申します。私は現在、一年間の在外研究のため、アメリカはニュージャージー州の Rutgers 大学というところに滞在し研究を続けております。日本の皆様へ何かアメリカの大学の哲学科の最近の雰囲気でもお伝えしては、というお勧めがありましたので、拙い筆をとっております。とはいえ、私の短い滞在と狭い見聞の範囲内では、語りうることはごくわずかで、会員の皆様の参考になるようなこともほとんどないことは重々承知しております。その点どうかご容赦ください。

まず大学について簡単に紹介しておく、Rutgers 大学はニューヨーク市から電車で1時間ほどの New Brunswick 市を本拠とするニュージャージー州立大学です。全米でも屈指の規模を誇る大きな大学だそうで、日本では想像もできないような広大なキャンパス内に、様々な department が点在しています。Philosophy department は Davidson Hall という比較的小じんまりとした建物内にありますが、faculty は充実していて、J. Fodor, C. McGinn, E. Sosa, S. Stich など、日本でもよく名の知られた教授陣がゼミや講義をおこなっております。私は自分の研究を続けるかたわら、いくつかのゼミを聴講させてもらいました。以下に私の個人的な感想を二三述べます。

言語哲学に関するゼミでは、B. Loewer 教授が Blackburn & Simmons 編の "Truth" を主なテキストにして、真理論における Deflationism についての検討をおこなっていました。教授の説明によると、Horwich や Field の Deflationism が

最近言語哲学の話題の一つの中心になっていることの背景には、長く言語哲学界を支配してきた「意味の理論」( = 自然言語のセマンティクス) の構築というテーマの握力が、90年代の初め以降緩んできた、ということがあるようです。(Loewer 教授の言い方によると、その仕事が労力の割には pay off しないものと多くの言語哲学者に意識されるようになった、ということでした) それに代わる一つのテーマとして、真理概念に何らかの実質的内容を含める Inflationism (Deflationism に転向する前の Field の physicalism もこれに含まれます) と、真理概念を「引用符はずし」のための形式的な論理装置とみなす Deflationism との対立というしかたでの真理概念の再検討が注目を集めるようになったという説明でした。Horwich の minimalism と Field の pure-disquotationalism のあいだの違いなど Deflationism の中でも微妙なしかし重要な対立があるようです。もちろん Davidson や Dummett は、いまでも Deflationist 達にとっては手ごわい論敵であり続けているのですが、少なくとも「意味の理論」を哲学の最も基本的な仕事と考える Dummett 流の言語哲学第一主義的思考方は、言語哲学者達の中でも少数派になりつつあることは確かなようです。

こころの哲学に関しては、J. Fodor 教授が自らの著書 'Concept' に基づいた授業を行っていません。「思考の言語」派の闘将らしい熱っぽい語り口による授業は、大学院生達の人気も高いようで、多くの聴講者を集めています。内容は、上記の著書を膨らませたもので、mental repre-

sentationを心的因果過程にあらわれる心的個物と見なす、という基本的立場にたつて、Davidson, Ryle, Peacocke,あるいはconnectionistたちを、批判的に論じていく、というものです。私に興味深かったのは、語の意味の文の意味に対する優先性とか意味観念説のような、ほんの10年程前の日本ならそれを否定できなければ現代哲学を論じる資格はない、と思われていたような考え方が、Foder教授によって次々に復活させられていくことでした。教授によると、意味のepistemologyから意味のmetaphysicsに関わる結論を導き出す従来の議論は、すべて誤りだ、ということになります。そうした観点から、radical translation, radical interpretation, principle of charityなどに依存する議論が批判されています。教授自身は自らの考えをヒューム流の意味観念説に近いものと見なしているようです。もちろんFoder教授の立場は特異なものなのかもしれませんが(教授自身、「自分の本の読み方は他の人達と全く違っている、ときどきひどく孤独に感ずることがある」と授業の中で言っていました)、上記のような考えを現代の代表的哲学者の一人から聞くのは、やはり新鮮な感じがしました。哲学の学説は

どれもdie hardなものだ、というのが私の素朴な感想です。

以上単なる雑駁な感想で申しわけありません。最後に例の9/11のterrorist attackについて一言だけ申し添えます。ニュージャージー州はニューヨーク市の隣ということもあり、事件はかなり深い影響を与えたようです。大学も数日間の休講措置がとられました。それに続くanthrax騒ぎや愛国主義の高まりなど、やはり街中では緊張した雰囲気はしばらくはただよっていました。しかし大学の中では、少なくともphilosophy departmentでは、授業再開後は学生や教授達に動揺した様子は無く、淡々としかし熱心なdiscussionが行われていました。こうしたところは大国としての余裕なのか、哲学という学問の性質によるのかはわかりませんが、「日本で同様の事件が起こったら、日本の大学はどうするだろうか」という思いを抱かせられました。

以上長々と駄文をつづってしまいました。最後になりますが、会員の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

03/03/02 ニュージャージーにて。中釜浩一。

## 会務報告

(2001.4.1 ~ 2002.3.31)

### 日本科学哲学会第10期理事会

#### 第5回

日時：2001年4月14日(土) 13:00-13:50

議題：1. 事務局担当理事、事務局担当幹事について

2. 新入会員、退会会員について

3. 『科学哲学』掲載論文の著作権について

4. 収支決算・予算について

#### 第6回

日時：2001年6月23日(土) 13:30-14:20

議題：1. 新入会員、退会会員について

2. 新入会員の入会通知、入会年度、会費納入について

3. コピー機使用料の支払いについて

#### 4. その他

電子メールによる会議通知について

#### 第7回

日時：2001年9月8日(土) 13:30-14:10

議題：1. 新入会員、退会会員について

2. 退会希望者の未納会費について

3. 第35回大会について

4. その他

レフリー選出について

#### 第8回

日時：2001年11月17日(土) 12:00-13:00

議題：1. 新入会員、退会会員について

2. 第35回大会実行委員長について

**第9回**

日時：2001年11月18日(日) 12:00-13:00

- 議題：1. 学会誌編集委員長について  
2. 幹事の任期について

**第10回**

日時：2001年12月15日(土) 13:30-15:00

- 議題：1. 新入会員・退会会員について  
2. ノーベル賞100周年記念フォーラムについて  
3. 学会誌編集委員について  
4. 第35回大会実行委員について  
5. 科研費(出版助成)申請について  
6. 学会所有のプリンタについて  
7. その他

Detlefsen 教授の講演について  
本学会主催の講演に基づく論文・abstractの掲載権について  
事務局宛パンフレット類の取り扱いについて

**第11回**

日時：2002年3月30日(日) 13:20-14:10

- 議題：1. 新入会員・退会会員について

『科学哲学』34巻編集委員会

**第2回**

日時：2001年4月14日(土) 15:15-16:00

- 議題：1. 『科学哲学』34巻1号(2001.5発行予定)の編集及び制作進行状況について  
2. その他  
再審査における「C」判定について

**第3回**

日時：2001年6月23日(土) 14:30-15:20

- 議題：1. 『科学哲学』34巻1号(2001.5発行)の編集報告  
2. 『科学哲学』34巻2号(2001.11発行予定)の審査状況の報告  
再審査における「C」判定について

**第4回**

日時：2001年9月8日(土) 14:10-15:00

- 議題：1. 『科学哲学』34巻2号(2001.11発行予定)の審査状況の報告  
2. 『科学哲学』34巻2号の制作進行状

況の報告

3. 同一著者による複数投稿について

『科学哲学』35巻編集委員会

**第1回**

日時：2001年12月15日(土) 15:15-17:00

- 議題：1. 『科学哲学』35巻1号(2001.5発行予定)の編集状況の報告  
2. 『科学哲学』35巻2号(2001.11発行予定)の特集テーマについて  
3. 書評に取り上げるべき書籍について  
4. 科研費(出版助成)申請について

**第2回**

日時：2002年3月30日(土) 14:20-15:10

- 議題：1. 『科学哲学』35巻1号(2001.5発行予定)の製作状況について  
2. 応募論文の審査状況について  
3. 書評に取り上げるべき書籍について

第34回大会実行委員会

**第1回**

日時：2001年4月14日(土) 13:50-15:15

- 議題：1. 特別講演について  
2. シンポジウムについて  
3. ワークショップについて

**第2回**

日時：2001年6月23日(土) 15:30-17:00

- 議題：1. 特別講演について  
2. シンポジウムについて  
3. ワークショップについて  
4. 第34回大会プログラムについて

**第3回**

日時：2001年9月8日(土) 15:30-17:00

- 議題：1. 準備状況について  
2. 研究発表について

第35回大会実行委員会

**第1回**

日時：2002年3月30日(土) 15:30-17:30

- 議題：1. 特別講演について  
2. シンポジウムについて  
3. ワークショップについて

## 会計報告

### 【2000 年度決算】

収 入：前年度繰越金	2,009,720
学会費納入	2,237,000
大会参加費	159,000
学会誌売上	167,769
預金利息	955
出版社著作権協議会分配金	50,000
合 計	4,624,444

支 出：33 巻 1 号制作費	377,500
33 巻 2 号制作費	502,750
ニューズレター制作費	82,200
第 33 回大会運営費	263,200
通信費	380,835
印刷費	116,100
消耗品費	14,705
委員会交通費	185,000
事務局費	132,594
アルバイト代・手数料	124,618
小 計	2,179,502
次年度繰越金	2,444,942
合 計	4,624,444

### 【2001 年度予算】

収 入：前年度繰越金	2,444,942
学会費納入	2,200,000
大会参加費	100,000
学会誌売上	100,000
預金利息	1,000
出版社著作権協議会分配金	50,000
合 計	4,895,942

支 出：34 巻 1 号制作費	400,000
34 巻 2 号制作費	400,000
ニューズレター制作費	100,000
第 34 回大会運営費	250,000
通信費	400,000
印刷費	220,000
消耗品費	50,000
委員会交通費	200,000
事務局費	150,000
アルバイト代・手数料	100,000
予備費	2,625,942
合 計	4,895,942

## 学会・研究会予告

日本科学哲学会第 35 回大会  
 【期日】 2002 年 11 月 9・10 日  
 【場所】 新潟大学

日本哲学会第 61 回大会  
 【期日】 2002 年 5 月 18・19 日  
 【場所】 九州大学

科学基礎論学会講演会  
 【期日】 2002 年 6 月 15・16 日  
 【場所】 東京工業大学

日本記号学会 2002  
 【期日】 5 月 11 日・12 日  
 【場所】 横浜国立大学

第 19 回日本認知科学学会大会  
 【期日】 2002 年 6 月 14 日～16 日  
 【場所】 北陸先端科学技術大学院大学  
 【詳細】 <http://www.jaist.ac.jp/jcss2002>  
 をご覧ください。

日本生命倫理学会平成 14 年度年次大会  
 【期日】 2002 年 11 月 2 日(土)・3 日(日)  
 【場所】 広島国際会議場  
 【詳細】  
 事務局(〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45  
 TEL. 03-5765-6186)にお問い合わせ下さい。

---

**International Congress: Causation and Explanation in the Natural and Social Sciences**

May 15-18  
Ghent University, Ghent, Belgium  
<http://logica.rug.ac.be/censs2002/>

**Euro-Conference in Model Theory and Applications**

May 27 - June 1, 2002  
Ravello, Italy  
[www.logique.jussieu.fr/ECMTA-02/](http://www.logique.jussieu.fr/ECMTA-02/)

**Processes-Analysis and Application of Dynamic Categories: An Interdisciplinary Workshop on Non-Reductive Theories of Processes**

June 5-8, 2002  
Sandbjerg Castle Soenderborg, Denmark  
<http://www.hum.au/filosofi/process>

**ECAP 4 : Fourth European Congress for Analytic Philosophy**

June 14-18, 2002  
Lund University, Lund, Sweden  
<http://www.dif.unige.it/esap/ecap4.htm>

**Logicia 2002**

June 18 - 21, 2002  
CASTLE ZAHRADKY, Czech  
<http://www.flu.cas.cz/Logica/Logica2002-1.htm>

**Intentionality: Past and Future**

June 21-23, 2002  
Miskolc, Hungary  
<http://hps.elte.hu/intentionality.html>

**Temporal Representation and Reasoning**

July 7-9, 2002  
Manchester, UK  
<http://www.cs.man.ac.uk/img/TIME-2002/>

**Karl Popper Centenary Conference**

July 12-14, 2002  
University of Canterbury, Christchurch, New Zealand  
[http://www.phil.canterbury.ac.nz/miscellaneous\\_pages/popper.htm](http://www.phil.canterbury.ac.nz/miscellaneous_pages/popper.htm)

**The 2002 Federated Logic Conference**

July 20 - August 1, 2002  
Copenhagen, Denmark,  
<http://floc02.diku.dk/>

**2002 ASL European Summer Meeting (Logic Colloquium '02)**

August 3-10, 2002,  
Munster, Germany  
<http://www.math.uni-muenster.de/LC2002/>

**Sixth Summer Symposium on the Philosophy of Chemistry and Biochemistry**

August 4-8, 2002,  
Georgetown University, Washington, DC  
<http://www.georgetown.edu/earleyj/ISPC.html>

**ESSLI 2002**

**14th European Summer School in Logic, Language and Information**

August 5-16, 2002  
Trento, Italy  
<http://www.essli2002.it/>

**29th Hume Society Conference**

August 6-10, 2002  
At the University of Helsinki, Finland  
<http://www.rit.edu/~692awww/helsinki/>

**Computing and Philosophy Conference**

August 8-10, 2002  
Carnegie Mellon University,  
Pennsylvania, USA  
<http://caae.phil.cmu.edu/CAAE/CAP/CAPpage.html>

**11th UK Conference on the Foundations of Physics**

September 9 - 13, 2002  
University of Oxford UK  
<http://users.ox.ac.uk/~sfop0045/ukf2002.htm>

**The Royal Institute of Philosophy Conference: Action and Agency**

September 13-15, 2002  
St. John's College, University of Oxford  
<http://users.ox.ac.uk/%7Elawf0081/rip/index.htm>

**Philosophical Insights into Logic and Mathematics: The History and Outcome of Alternative Semantics and Syntax**

September, 30 - October 4, 2002  
NANCY, France  
<http://www.univ-nancy2.fr/ACERHP/colloques/symp02/Symp02-angl.html>



**Philosophy and Neuroscience**

October 17-20  
Carleton University, Ottawa, Canada  
<http://www.carleton.ca/iis/Conference/index.html>

**International Conference on the Philosophy of Mathematics : Perspectives on Mathematical Practices**

October 24-26, 2002  
Free University of Brussels (VUB), Belgium  
<http://www.vub.ac.be/CLWF/PMP/>

**Workshop of Theory of Knowledge**

October 27-30, 2002

Jablonna, (near Warsaw) Poland  
<http://www.jtb-forum.pl/jtb/c.html>

**George Berkeley 250th Commemoration**

April 3-5, 2003  
Texas A&M University, Texas USA  
<http://www.phil.tamu.edu/~sdaniel/berkeley.html>

**12th. International Congress of Logic, Methodology and Philosophy of Science**

August 7-13, 2003  
Oviedo (Spain)  
<http://www.uniovi.es/Congresos/2003/DLMPS/>



寄贈図書紹介

2001年4月1日～2002年3月31日

垣久和著『公共の哲学の構築をめざして  
キリスト教世界観・多元主義・複雑系』  
教文館

『大学教育学会誌』第23巻第2号 大学教育会

田畑博敏著『フレーゲの論理哲学』  
九州大学出版会



『科学哲学』刊行年表(1971～2001年)

タイトル	定 価		
4 (1971年)	1,200円	22 (1989年)	科学と反 - 实在論 1,800円
5 (1972年)	1,000円	23 (1990年)	科学哲学の未来を問う 1,800円
6 (1973年)	非売品	24 (1991年)	異文化理解の基礎 1,800円
7 (1974年)	記号・情報・論理 1,300円	26 (1993年)	科学的説明 2,000円
8 (1975年)	行為の理論 1,300円	27 (1994年)	量子力学と物理的实在 2,000円
9 (1976年)	様相論理学 1,300円	28 (1995年)	カオスをめぐって 1,200円
10 (1977年)	心身問題と道徳 1,300円	29 (1996年)	1,800円
11 (1978年)	解釈とモデル 1,500円		特集1 デュエムの科学哲学の現代的意義
12 (1979年)	言語と非言語 1,500円		特集2 サイバネティクス
13 (1980年)	社会科学と哲学の間 1,500円	30 (1997年)	近代における科学と哲学 1,500円
14 (1981年)	論理とは何か 1,600円	31-1 (1998年)	1,500円
15 (1982年)	科学哲学の展望 1,600円	31-2 (1998年)	生物学的説明 1,500円
17 (1984年)	合理性とは何か 1,700円	32-1 (1999年)	1,500円
18 (1985年)	志向性について 1,700円	32-2 (1999年)	医療の哲学に向けて 1,500円
19 (1986年)	言語理解 1,700円	33-1 (2000年)	1,500円
20 (1987年)	意識・機械・自然 1,700円	33-2 (2000年)	心・生命・コンピュータ 1,800円
21 (1988年)	私 の同一性 1,700円	34-1 (2001年)	1,500円
		34-2 (2001年)	進化論から見た心と社会 1,500円

購入を希望される方は、事務局宛ご連絡下さい。(1～3号、16号、25号は在庫切れです。)

## 事務局からのお知らせ

1. 2002年度分の学会費をお納め下さいますようお願い申し上げます。貴台の(今年度分を含めた)学会費未納分合計金額に相当する数字が、封筒表面のラベル右下に記載されていますので、同封の振込用紙にてお納め下さいますようお願い申し上げます。なお、「-」表示の方は完納となっております。

## 編集後記

飯田隆さんから引き継いで私が担当することになりました。といっても、ほとんど何もしていません。これを書くのが仕事と言っても過言ではありません。実は、私はパソコン初心者です。ずっとワープロで仕事をしてきたのですが、製造中止という話を聞き、しょうがなくパソコンを買いました。それでも、しばらくの間はパソコンの前にワープロを置いて、それで仕事をしていました。仕事が終わるとワープロをどけてパソコンを少しいじって、やれやれとため息をつき、なんだこいつはと怒り、またうんざりしてため息をつくというありさまでした。このまえ原稿をプリントアウトしたら、ページ番号がついていませんでした。つけようと思って、こちょこちょして、それで印刷したら全部同じ番号でした。いやんなって未解決のまま放置してあります。そんなていたらくです。というわけで、国際学会の案内も塩谷賢さんに取り出してもらいました。ありがとうございました。原稿も、中山康雄さんと加地大介さんをお願いしたら、きちんと締切を守って充実した記事を送っていただけました。私の仕事はそれを事務局に転送するだけです。後は事務局がやってくれます。楽勝です。そこでお願いですが、国際学会等、何か興味深い話題をお持ちの方がいらっしゃいましたら、事務局宛にご一報ください。というわけで、これからしばらくは、よろしく願いいたします。なに、簡単な仕事ですから、すぐにどなたかに引き継がせてあげます。

(野矢茂樹)

日本科学哲学会ニューズレター No. 21 2002年5月20日

編集兼発行 日本科学哲学会

事務局 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1  
東京都立大学人文学部哲学科内 日本科学哲学会  
Fax. 0426-77-2073【宛名「日本科学哲学会」明記のこと】  
e-mail. philsci@comp.metro-u.ac.jp

印刷 文成印刷 〒168-0062 東京都杉並区方南 1-4-1